

第4節 男女倉型有槌尖頭器

保坂康夫（山梨県立考古博物館）

1) 剥離過程の記載

韮崎市滝坂遺跡出土。単品での出土であり、生活の痕跡をとどめない単独出土遺跡である。長さ7.6cm、幅3.6cm、厚さ1.2cmである。先端をカジリで欠損するものの、2mm程度であり、ほぼ完形である。カジリは裏面右側縁中央にも若干みられる（第45図39、白抜き剥離面）。黒色不透明の黒曜石で、径2mmほどの挟雑物を2粒ほど含むが、いわゆる冷山系ないしは蓼科系ほどに挟雑物はみられず、良質な黒曜石である。以下第3図により剥離過程を記述する。

素材は、扁平礫と思われる。表裏面に自然面を残し、自然面はいずれも、ズリ面といわれる古い自然剥離面である。古い剥離面があり、最終的に器体の調整を行った剥離よりも古い形態段階の存在を示す剥離面が残存する。正面の中央部に5枚が観察できる。器体の右上からの剥離（X-1）、左上から（X-2）、左から（X-3）の3枚と、先端部方向からの2枚（B-1、B-2（後者はステップエンド））である。これらの剥離群を整形第1段階の剥離群と呼んでおく。自然面が器体中央に残存しており、素材の厚さは、整形第1段階でも、現状の器体の形状を決定した最終的な剥離群である、整形第2段階の剥離群においても、大きく変化はなく、器体の大きさのみ変化しているものと思われる。そうすると、整形第1段階の剥離群の内、先端部側からのB-1とB-2は、器体周辺の調整剥離としては奇異な剥離である。男女倉型の特徴である槌状剥離とも考えられるが、断面bで示したとおり、断面長軸（レンズ状断面の両端を結んだ線分）に平行しており、整形第2段階の長軸に傾斜した槌状剥離面や、男女倉型彫器とも言われる長軸に直行するような剥離面とは、性格を異にしていると思われる。しかし、槍先形尖頭器の周辺調整剥離面としても奇異であり、強いて解釈するならば、槌状剥離に失敗し、衝撃剥離のように縦溝状に剥離が入ってしまったものなのかもしれない。

裏面にも、古い剥離面があり、整形第1段階の剥離群とすることができる。Y-1～3とするが、いずれも素材自然面に平行しており（断面c）、整形第1段階の器体断面は、D字状であった可能性が高い。

整形第2段階では、正面では、まず大きな剥離が両縁部になされ、ついで微調整のための小剥離がなされている。裏面では左側縁からの剥離が主体で、中規模から小規模の剥離群である。右側縁には中央付近のみ若干の平坦剥離がみられるのみで、自然面が大きいのこされている。したがって、正面から見て左側縁は片面加工、右側縁が両面加工の半両面加工の槍先形尖頭器である。

整形第2段階の槌状剥離（A-1、A-2、いずれもステップエンド）は、先端側からみごとに剥離面を形成しているが、右側縁からの剥離面に切られており、槌状剥離以後に先端部の整形が続けられていることが分かる。これについては、①槌状剥離の後に右側縁を加工して先端を仕上げたもので、槌状剥離が仕上げの段階の剥離ではないことを示すか、②仕上げの段階の剥離であるが、槌状剥離以後の使用により先端部が欠損して、右側縁を加工し、先端を再び尖らせたといった、2通り解釈が考えられる。また、A-2の存在は、複数枚の槌状剥離がなされた可能性を示している。

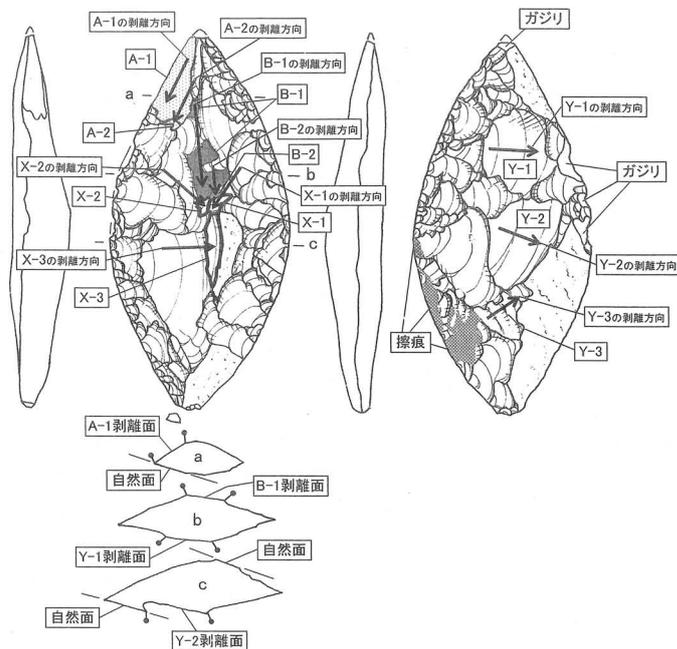
基部をみると、端部に自然面が残存しており、基部を完全に尖らせようとは意図されていないことがわかる。

なお、裏面左側縁下半分に擦痕によるスリガラス状の面が発達している。線状痕は、ルーペによる観察では、刃部に直行する。また、片面にしか観察できない。この擦痕のある面の剥離面群は、正面側の剥離面群を切っていて、正面側よりも新しい剥離群であることから、正面側に擦痕がないのは、剥離により除去されてしまったものではないことが明らかである。つまり、当初から片面にしかついていなかったと考えられる。周囲の剥離面も擦痕を切っているものは見当たらない。しかし、着柄によるものか、スクレーピング、ないしはホイットリングのような使用によるものかは、予断をゆるさない。

2) 男女倉型有槌尖頭器をめぐる研究史と編年的位置

森嶋稔氏により注目され、搔器、ナイフ形石器、彫器の3器種を両面調整されたブランクから作り出す技法を「男女倉技法」と呼んだ。滝沢遺跡のような縁部が鋭角となるような槌状剥離で、槌状剥離の後に若干の加工がなされた石器は、「男女倉型ナイフ形石器」と分類された。そのほか、両面体の刃縁部を剥ぎ取るように、縁部が直角な槌状剥離がみられるものを「男女倉型彫器」、槌状剥離はみられないが、両面体の両縁部に細部加工がなされた「男女倉型搔器」が提示された（森嶋稔ほか 1975『男女倉』和田村教育委員会）。

これに対し、堤隆氏は、「男女倉型搔器」は存在が不確かであるとした上で、刃縁部の角度が80°未満のより鋭角な槌状剥離をもつものを「男女倉技法」Aにより製作された「有槌尖頭器」、80°以上の直角に近い角度の刃縁部をもつものを「男女倉技法」Bにより製作された「尖頭形彫刻刀形石器」と、再定義した（堤隆 1988・1989「槌状剥離を有



第3図 滝坂遺跡出土の男女倉型有槌尖頭器

する石器の再認識（上・下）『信濃』40-4・5）。

このなかで、堤氏は、両側縁がゆるやかな弧状を呈するシンメトリーな平面形で、レンズ状の断面をもつものを「男女倉型有槌尖頭器」、ゆるやかな弧状を呈する片側縁に対し、槌状剥離側の側縁がくの字状に角をもつ平面形で、その調整加工が主として素材剥片の背面側に集中するため断面が扁平なD字形となるものを「東内野型有槌尖頭器」と分類した。その分布について、「男女倉型有槌尖頭器」が青森県大平山元遺跡から、富山県立美遺跡、静岡県広合（ひろおや）遺跡までの、東北地域から中部・東海地域までの広い範囲に分布するのに対し、「東内野型有槌尖頭器」は下総台地の印旛沼周辺に限定されることを示した。

編年的には、「男女倉型有槌尖頭器」が相模野台地L2～BB1下部の諏訪間編年段階VIに出現するが、中部高地ではこれにやや先行することが予想され、ナイフ形石器文化のなかで発達し、槍先形尖頭器主体の段階には消滅してしまうことが指摘された。一方、「東内野型有槌尖頭器」は相模野台地BB0から出土し、槍先形尖頭器主体の段階に発達し、「男女倉型有槌尖頭器」に後出するとした（堤隆 1989「有槌尖頭器をめぐる評価」『長野県考古学会誌』59・60（シンポジウム特集号 中部高地の尖頭器文化））。

須藤隆司氏は、槍先形尖頭器の出現については、安斉正人氏の説（安斉正人 2004「東北日本における『国府系石器群』の展開—槍先形尖頭器石器群出現の前提—」『考古学』Ⅱ）を引用し、大平山元Ⅱ遺跡を北海道渡島半島と同じ頁岩地帯で両面調整技術構造を受容した現象と評価する。細石刃技術を拒否し、ナイフ形石器の狩猟具の理想形態の尖基柳葉形尖頭器のための両面調整技術を受容し、その試作品として槌状剥離を用いた有槌尖頭器が出現したとする。その情報は野尻湖集団に伝達され、さらに中部高地の集団にリンクした。情報の基本に大型品・柳葉形の製作という規範があったため、男女倉黒曜石原産地遺跡群に限定されたとする。男女倉型の両面調整技術構造を受容した後に砂川型が出現するが、試作段階の男女倉型では両面調整技術構造の効率性・経済性が十分に発現できないため、それを可能とする石材環境に適応した石刃技法を整備した結果とする。石材環境適応技術（ナイフ形石器文化伝統）の違いから、激しい地域差を持った地域社会（石器文化）が形成され、尖基柳葉形尖頭器という同一形態の狩猟具の要請の元に、同一の技術構造で製作された砂川型、杉久保型、男女倉型の三形態が出現したとする（須藤隆司 2005「杉久保型・砂川型ナイフ形石器と男女倉有槌尖頭器—基部・側縁加工尖頭器と両面加工尖頭器の技術構造論的考察—」『考古学』Ⅲ）。

以上のように、相模野台地における層位的出土例から、L2～BB1下部の諏訪間編年段階VIと編年的位置はほぼ確定したが、その特異な形態や製作技法の出現過程について、いまだに論議を呼んでいる。